

養殖カキのブランド化に向けた集団選抜育種

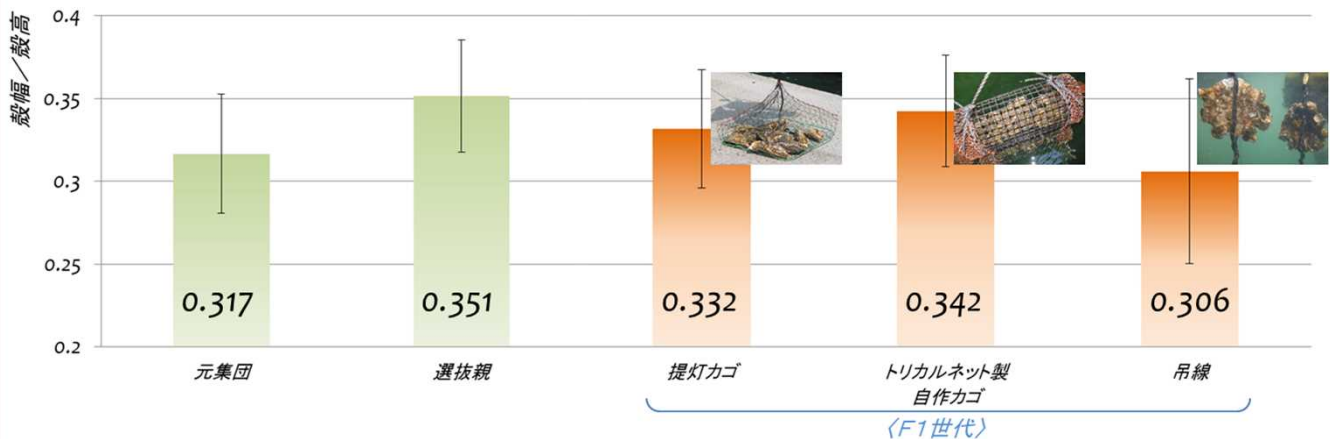
【背景・目的】

県内で養殖されるカキは主に「むき身」で流通していますが、最近、徐々に「殻付きカキ」での出荷が増えてきました。そこで、兵庫県産カキのブランド化をめざす上で、他のカキとひと目で区別できるような、外殻の「色」や「形」に特徴をもった養殖カキをつくることを目的として、複数の親を用いた集団選抜育種による品種改良を試みました。

【成果】



天然のマガキの外殻の色は、黒っぽいものや白っぽいもの、黒色や白(黄)色が入り混じったものなどさまざまです。外殻の色が全体に黄または白色のもの、黒地に一本の白線があるもの、白地に複数の黒縞があるものを親として集団選抜育種を行うと、それぞれほぼ親と同じような色調となりました。



天然のマガキから、殻高に対する殻幅の割合が0.3以上であることを基準にして親を選抜し、集団選抜育種を行うと、F1世代の殻幅は元集団より大きくなりました。しかし、殻幅が大きいという形質発現には、吊線式ではなく、シングルシードのカゴ養殖が適していることがわかりました。

【技術の活用】

形の良い養殖カキをつくるのに適した新たな養殖方法(シングルシードのカゴ養殖)の定着を進め、将来的には、集団選抜育種手法の技術移転を行い、兵庫県産養殖カキのブランド化をめざします。